

日吉台地下壕保存の会会報

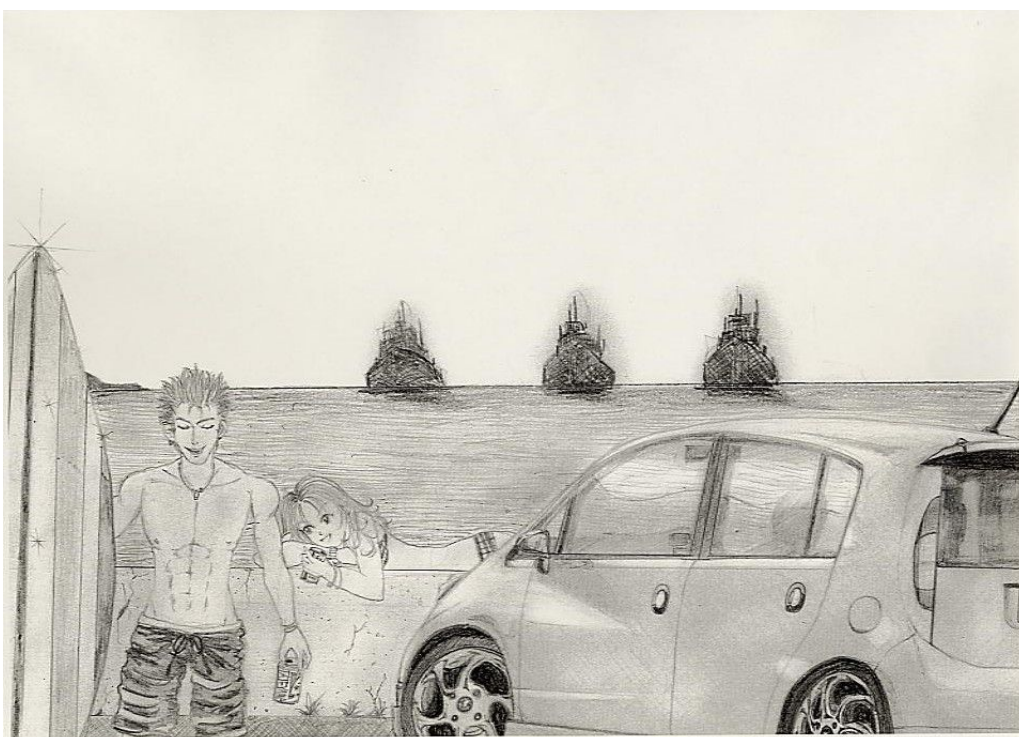
第72号
日吉台地下壕保存の会

第8回戦争遺跡保存 全国シンポジウム千葉・館山大会 成功裡に閉会

マスコミでも多く報道され、全国的にも注目されていた「第8回戦争遺跡保存全国シンポジウム館山大会」が8月20日(金)から24日(月)まで4日間にわたって開かれました。大会には400人以上が参加、日吉台地下壕保存の会からは14名、神奈川からは横須賀の方々も合わせて19名、地の利もあって地元千葉の方々に次いで多い参加となりました。

初日の20日は茂原と館山の2コースでフィールドワークが行われ、100人以上の方が茂原の海軍飛行場跡や掩体壕、館山の特攻基地跡などを見学しました。

21日の午前中は館山の赤山地下壕のフィールドワークが行われたあと、11時より全国ネットの総会が行われ、活動方針、



会計、役員が承認されました。構成団体として日吉台地下壕保存の会から、これまで通り2名が運営に参加しています。午後から全体会が館山夕日海岸ホテル・ホールで行われました。館山市合唱連盟「ウミホテル〜コスモ・ブルーは平和の色」の美しい合唱がオープニングに披露され、会が始まりました。主催者を代表して全国ネットの村上有慶氏が「戦争遺跡という言葉は市民権を得たと思う。館山でのシンポジウムがこれからのモデルになる。文化財保護法が変わり、負の遺産といわれる戦争遺跡をどのように残していくかが



村上有慶戦争遺跡保存全国ネットワーク代表

課題である。」と挨拶しました。共催者として館山市長辻田実氏及びNPO南房総・戦跡活用フォーラム理事長愛沢伸雄氏の挨拶のあと、全国ネット代表十菱駿武氏がこの1年間の戦争遺跡をめぐる全国の情勢と課題を中心に基調報告をしました。氏は「文化庁の近代遺跡所在調査・詳細調査は詳細調査を終え、報告書編集に入っているが、全国ネットは全国31件の追加調査を要望している。5月の国会で文化財保護法が改正され、主に近代遺跡の保存のために建造物だけだった登録有形文化財に遺構や地下

壕なども届け出制で保存できることになったが、所有者の承諾・申請、自治体からの指定・登録申請がなければ法的な文化財にならないので、市民団体の更なる調査・保存運動が肝要である。」と強調されました。地域報告では館山市教育委員会の杉江敬さんが市内47箇所の戦争遺跡について説明。市全体を博物館にする「地域まるごとオープン・エア・ミュージアム」構想を計画していることなどを発表し、館山市の戦争遺跡保存についての先進性を伺うことができました。また日吉台地下壕保存の会から茂呂秀宏さんがマンション建設を巡って航空本部地下壕の入り口が破壊の危機にあることを住民とともに反対して運動を行っていることを報告しました。

続いて、分科会が三箇所に分れて行われ、(第1分科会「戦争遺跡保存運動の現状と課題」第2分科会「調査方法と保存整備の技術」第3分科会「平和博物館と次世代への継承」特別分科会「南房総平和活動シンポジウム」、日吉台地下壕保存の会からは第1分科会に茂呂秀宏さん、第3分科会に岡上そうさん、富沢慎吾さんが発表を行いました。

夜はウミホテル鑑賞会とともに交流会が始まりました。ウミホテルは館山の海上に棲息する微生物で戦争中には軍隊がこれを子どもたちに採集させて発光物質を軍事に使用したということです。ホテルのホールにウミホテルが青紫の美しい光を発したとき、「ホーッ」という声一度にあがりました。交流会では全国からの参加者が晚餐をともにし、交流を深めました。

22日午前中は分科会が引き続き行われ、午後は作家の早乙女勝元氏による「平和の語り部としての戦争遺跡」と題した記念講演が行われました。講演では東京大空襲・戦災資料センター設立をめぐる経験談から始まって、開館後2年ほどで2万人もの方々が訪れていること、そのうち5千人ほどは小中高生で、修学旅行のスポットにもなりつつあること、館の運営、維持、管理の難しさ、平和学習の大切さが述べられ、東京大空襲では丸焼けの中焼け残った電柱などはあるが戦争遺跡といったものはあまりない。大きな遺跡のある館山などの運動に期待したいと戦争遺跡の保存の大切さを語られました。



記念講演 早乙女勝元氏

その後分科会報告の後大会アピールが採択され、翌23日の館山市・富浦町の見学会を残して大会は幕を閉じました。

○日吉台地下壕保存の会からの報告

第1分科会

茂呂 秀宏

第1分科会で「旧海軍軍令部第三部・航空本部等地下壕の破壊のもたらすマンション建設計画と反対運動報告」という発表をしました。私のレポートについて館山市議会議員さんなどから建築事務所など処分庁の手続き上の瑕疵の有無について（館山市では、処分庁の文化財課への文化財の有無の確認の手続きを省略したことをつき、事業を中止させたとのこと）、斜面緑地開発の規制との関わりについての質問、また前日の交流会では神奈川の保存団体の方から法律の専門家を使わず法的手段で抵抗を試みたことの「無謀さ」を指摘された方がおられました。（取り付け道路などの不備などをついた工事差し止めなどを例にして）指摘されたことは百も承知



茂呂 秀宏氏

（すでに内心、これ以上《行政事件訴訟法》での抵抗は、弁護士ぬきでは無理であると思っていた）と喉まで出かかっていたのですが、改めて具体的内容を指摘され、「無謀さ」を改めて認識したことも事実でした。ありがとうございます。ただ素人なりに仲間と相談しながら審査請求書、反論書、弁明書を書き提出し陳述したことの意味を改めて確認した次第です。大会冒頭の全体会の直後「銀行が業者に金を貸さない、業者が土地の提供を保存の会に言うてくるなんて大変な運動の成果ですね」と声をかけてくれた参加者の声を大事にしていきたいと思っています。

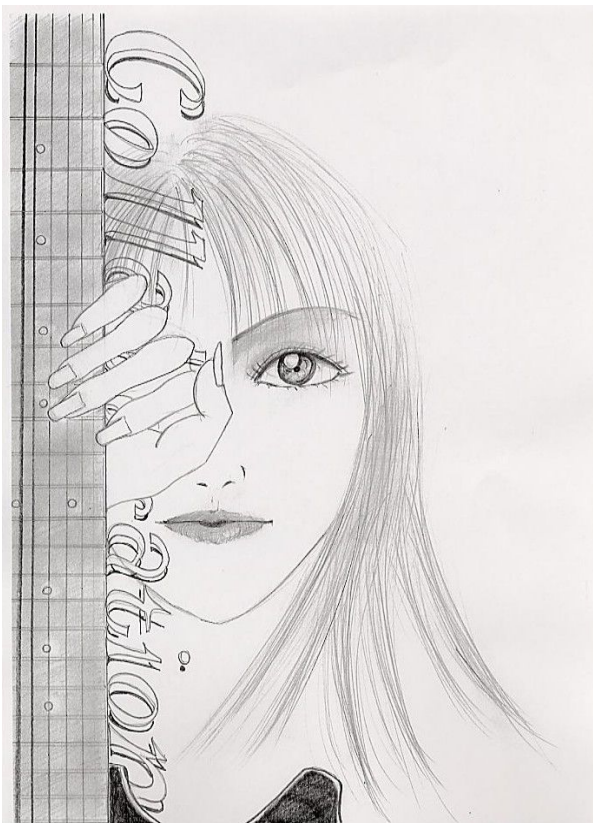
以下当日の冊子に掲載した分科会レポートの紹介です。

『 昨年(2002年)11月に日吉台の地下壕で私たちが「1-①」(航空本部地下壕)と呼んでいる地下壕のある場所にマンション建設計画の話が出てきました。この地下壕の北半分は慶應の用地内にあり、南半分は斜面緑地の慶應外の私有地となっており、本計画は私有地でのものであり、最終的には4000平方メートル弱の開発をなし、マンションを二棟建設するというもの。私たち保存の会はこの計画によって、この地下壕の南半分が破壊されてしまうこと、特に慶應キャンパス内の連合艦隊司令部とともに、文化庁の戦争遺跡指定のための調査対象となっており、その調査もやられないまま、破壊されてしまうことに対しどうしても納得がいかず、この計画をいち早く知り、緑地保護、環境の悪化を危惧する地元住民の方々とともに、当初から異議を申し立ててきました。直接業者と話し合うことはもとより、市長への働きかけ、建築事務所への働きかけ、さらには文化庁への働きかけも行ってきました。その結果とだけとは言い切れませんが、昨年3月に業者から横浜市に出されていた開発申請は翌年になっても許可が下りず、計画も雲散霧消したのではないかという気持ちになっていた矢先の今年(2004年)3月19日に突然開発許可処分がおろされました。そのような状況に対して住民はマンション建設反対の意思を立て看板設置ということで、また保存の会は、文化庁との話し合いを持ち、また両者は共同して行政不服審査法による許可処分の取り消しの審査請求を行い、当局の二度にわたる弁明書に対して二度にわたる反論書を提出し、また6月2日の公開口頭審理では、住民4名、保存の会3名が意見陳述を行いました。

審査請求の結果は6月24日に却下裁決で門前払いに近いものでしたが、内容的には私たちの文化財保護の要求、緑地保存を含めた住環境の保全の要求に対して、原告適格がないという形式論でしか対応できなかった処分庁(審査庁の判断も同じ)の判断は、全く無内容であるとともに、その結果として業者と一体になったものであることが判明し、反対

する側の意思を高揚させる結果をもたらしました。地元住民はマンション反対の立て看板を増やし、工事着工に備えています。保存の会は横浜市への働きかけを再開しました。そして、もういつでも着工してもおかしくないにも関わらず、業者の動きは今のところ全くなく、また業者の資金繰りが良くなく、この工事費の調達が困難になっている（銀行がお金を貸さない）という風評もあり、ある意味では面白い状況になっているのではないかと思います。

私たちとしては、このような業者の窮状があるのならば、そこに「つけ込み」、何か面白いことが出来ないでしょうか。全国での同様な事例がありましたら、今大会で是非教えていただき、これからの反対運動の糧として行きたいと思っております。』



コラボレーション

目の報告者の愛沢先生で、彼はNPOの結成などの多様な取り組みを紹介してくれました。

そして初日の最後の報告として、日吉台地下壕保存の会の岡上・富沢から7月に横浜の県民センターで開かれたイベント（「星祭りの広場」）で岡上会員が唄とギターで平和をアピールしたことを報告しました。このイベントは音楽や詩や映像で女子を表現する人々と参加者が一体となったコラボレーション（合作・共同作業）の試みで、この異なる分野の人々とも積極的に交流してい

第3分科会

富沢 慎吾

第3分科会のテーマは「平和博物館と次世代への継承」でした。司会を日吉台地下壕保存の会の新井副会長が務め、10本にもものぼる報告とそれを巡る熱心な討論が繰り広げられました。（参加者は35名から40名）

初日は①「文化祭で取り組んだ戦争展」

（千葉県歴史教育者協議会：野口さん）②「南房総安房の戦争遺跡をめぐって：千葉県立長狭高校3年生 鈴木君」③「地域史に安房の戦争遺跡をどう位置づけるか：NPO南房総文化財戦跡活用フォーラム：愛沢さん」④「表現ジャンルを超えた平和への競演」（日吉台地下壕保存の会 岡上・富沢）の4つの報告が行われました。2番目に報告した鈴木祐紀君は18歳の高校生。かって「戦争オタク」であった自分自身が戦争遺跡保存運動の担い手として成長してきたプロセスを語ってくれました。

その鈴木君の成長を促した“恩師”が3番



戦争遺跡保存運動とギター演奏のコラボレーション
ギター演奏 岡上そう氏

くことが今後の戦争遺跡保存運動の発展のために必要ではないかと岡上会員は訴え、最後の自作の「銃声」と題する唄をギターの弾き語りで演奏しました。会場の参加者の皆さんからは暖かい拍手と声援をいただきました。

2日目は⑤「公開講座『多摩の戦争遺跡を歩く』の報告」(浅川地下壕の保存を進める会:中田さん)⑥「文化体験プログラムに戦跡巡りを取り入れて」(茂原市教育委員会生涯学習課:藤乗さん)⑦「日韓学生交流」(千葉県日韓関係史研究会:三橋さん)⑧「貝山地下壕見学ガイドの9年目を迎えて」(横浜市立六浦小学校:大黒さん)⑨「山梨平和資料センター建設を目指して」(山梨県戦跡ネットワーク:浅川さん)⑩「津島丸60年目の出航—津島間丸記念館が目指すもの—」(沖縄平和ネットワーク:村上さん)の6本の報告が行われ、最後にこの春「日の丸・君が代」問題でたたかっている東京の教師の方からのアピール発言もありました。

今年の第3分科会は初日の高校生の発言や岡上会員の報告ならびに唄とギターの“弾き語り”のように若い世代の活躍の時代がいよいよ到来したことを示していたと思います。また地元千葉県からの報告が5本にもものぼり、千葉が今後の戦争遺跡保存運動のひとつの“拠点”となるであろうことをうかがわせる分科会でもありました。神奈川もがんばらなくっちゃ、と思いました。

戦争遺跡保存全国シンポジウム館山大会と 南房総戦跡見学会に参加して

下村 欣也

昨年同じ港北区内から日吉に転居したのを機に、予て聞いていた日吉地下壕の保存の会に4月見学会の時入会し、5月4日に館山戦跡見学バス・ツアーが企画されたのを好機に参加した。その内容は前号の特別投稿で詳しく述べられているが、鋸南市岩井袋基地跡、(人間魚雷“回天”格納壕、特攻艇“震洋”出撃基地と推定、)三芳村下滝田基地跡(丘陵畑地内特攻機“桜花”カタパルト発射台ブロック)館山市128高地地下壕跡、戦闘指揮所、作戦室)その丘上にある「従軍慰安婦慰霊碑」)「赤山地下壕要塞跡」などが含まれる。特に巨大な「赤山地下壕」は、説明書にあるように、基地司令部、戦闘指揮所、兵舎、病院、発電所、航空機部品格納庫、兵器収納庫、燃料貯蔵庫などの施設があったとされ、大規模な地下壕が縦横に張り巡らされ、その一部が市の良い維持、管理の下に見学コースとして無料公開されている。見学に参加して以来、今日から見ればはかない諸兵器、戦法の立案、開発、改良、性能向上の技術的経緯の関係者の手記、戦史研究者による調査記録、作家のノンフィクション物などが目に付くことが多い。戦史的に見れば国土防衛から本土決戦が叫ばれる段階になると、他の諸島嶼の守備軍の全面的壊滅、甚大な人的犠牲を思い浮かべるまでもなく、退勢挽回や反撃の可能性はないが、先の見通しもない徹底抗戦の軍指導部主導の下、当時の挙国的精神状態で兵員、技術者、作業員、一般国民を含む協力者が膨大な人的、物質的エネルギーを消耗的に注ぎ込んだことに思いを致すのである。

私は若狭湾の西側の一角で小(国民)学校、旧制中学校下級生時代をその頃過ごし、舞鶴鎮守府管区内で今日景勝観光地の海岸沿いに至る所、“要塞地帯・写真撮影禁止”の立て札があったことを戦時色が風靡

する世の中(灯火管制、校庭・空き地の開墾、軍事教練、勤労奉仕・学徒動員、物資不足、配給制、空襲、時局逼迫など)と共に思い出す。日露戦争前から建設されたロシア軍の上陸、侵攻に備えた舞鶴港湾防備の周辺の山上の要塞砲台跡も今次戦争遺跡に混在すると聞くがまだ見学の機会を得ない。

今回は8月20日から23日に「第8回戦争遺跡保存全国シンポジウム館山大会」(館山夕日海岸ホテル)

と南房総軍事施設跡見学会が開催され、私の日程の都合で前半のみ参加した。初日に茂原駅前約100名が集合し、暑い中バスに分乗して、同市役所の本シンポジウム千葉県実

行委員長各務敬氏の案内で茂原海軍航空基地、掩体壕、滑走路跡(車中)、夷隅町(中川小学校裏手山内特攻機“桜花”格納壕・回転台跡)、海辺の大原町小浜人間魚雷“回天”格納壕を見学した。人家に近い掩体壕、格納壕などは雑物置場、塵芥捨場など放置状態のところもあった。茂原市内の農地に点在する訓練機、実戦機用の掩体壕は11基も存在し、航空本部・兵舎・各種施設建物、誘導路、滑走路跡は学校、住宅地、工場、道路などの敷地となり、勿論当時の全貌は知ることは出来ないが、私有地内の問題はあっても、当市としては案内板など保存、見学の便宜を図っていると思った。それにしても壕の間口上部の高さ、形状に合う特定収用機種・形式・寸法は分からないが、近時は大型化した戦闘機としても掩体壕形態が意外に小さく見え、(内部は一部土壌・塵芥などの堆積、物置としての利用など)、また雲霞の如く来襲する敵機への迎撃機数には少なすぎる気がした。膨大な物量を誇るアメリカ側には敗勢日本側からの反撃力に備える必要はなかったのではあるか。館山では上記の「赤山」地下壕を再度見学し、感想を新たにしたが、茂原から館山までの最寄りの戦跡と同様、富浦町大房崎、館山市州崎方面など見学の時間がなかったのは心残りであった。

シンポジウムでは第1、第2、第3分科会の「保存運動の現状と課題」「調査方法と保存整備の技術」「平和博物館と次世代への継承」特別分科会の「南房総平和活動シンポジウム」のほか記念講演(早乙女勝元氏)が予定された。第1分科会の初日には日吉台地下壕保存の会、掩体壕を文化財に推進する会(南国市)、日中協力・共同事業作り(7



第2分科会

31部隊遺跡世界遺産登録を目指す会)、貝山地下壕を保存する準備会、浅川地下壕の保存を進める会の活動報告を聴講した。各地の熱心な保存運動の経緯の一端、遭遇する問題点、同時に地元自治体の支援的認識、制度的背景の差を知ることが出来た。とくに731部隊関係の永久保存運動は国内に色々な歴史観が喧伝される今日、遺留物の被害がなお残る被害者側と異なり、国家的加害者側が心地の悪さや罪悪感を避けることなく、後世に生きる公正な教訓を学び取る基本的歴史教育と啓蒙が必要であろう。多数の中国内侵華抗日時代の資料館、記念館、博物館に見られるという被害者側の誇張、国内的宣伝と政策的利用、こちら加害者側の世代的無教育、無関心と感覚鈍磨、忘却に偏することを恐れるものである。

他の項目の詳細と感想については、全部に出席された別の方々が報告されると思うので冗長な駄文をこの辺で終わりにしたい。老齢ながら、今後の戦跡見学会と学習への参加に期待するところが大きい。

教育実践**子どもたちと戦争を結ぶ日吉台地下壕**

横浜市立下田小学校

山本浩二郎

1. 実践を振り返って**a) 教師の考え**

イラク戦争の話題がニュースや新聞で数多く流れ、戦争について改めて考えさせられた昨年2003年、6年生の子どもたちにとっても戦争への関心は高かった。「戦争はいけない」「人々がかわいそう」など戦争の悲惨さを思う子どもたち。しかしニュースや新聞から得られる情報は遠くの国で行われていることの思いも自分の中からわき上がった切実なものとは少々かけ離れているように感じていた。

実際私も初めての6年生の担任で、初めての歴史教育を試行錯誤の中進めていた。そして15年戦争の学習、平和教育について学習していく時、日吉台地下壕を中心に学習を展開していくことで、子どもたちの中に戦争を自分により身近なものとして捉えることが出来ると考えた。私自身港北区社会科研究会をして地下壕は3回見学していたが、教材として学習していくのは初めてであった。そこで3年前の直井先生の実践を参考に、子どもたちと同じ立場で戦争の学習を進め、考えを深めていった。

b) 子どもたちの様子

まず「戦争について」知っていることや思うことを子どもたち同士で話し合った。おじいちゃん、おばあちゃんの戦争体験の話や原爆ドームに行ったこと、防空壕のことなど、様々な話が出ていたが、日吉台地下壕について、知っている児童もいた。「地下壕って防空壕のことなの?」と思った子どももたくさんいて、自分たちの生活圏に大きな戦争遺跡のあることの驚きは、すぐに見学してみたいという関心・意欲の高まりにつながっていった。

実際に見学してみて、まずはその大きさにびっくりした児童が多く、そして「どうやってつくったのか」

「なぜつくったのか」「どのように使っていたのか」などのたくさんの疑問へと広がっていった。その後ビデオ(地下壕の様子が児童にも分かりやすかった)や資料による調べ学習をして、自分たちの疑問を解決していった。その中で「なぜ今でも地下壕を残しているのだろう」という疑問が子どもたちの中に強く残り、学習のまとめとしてみんなで自分の考えを発表し話し合うことにした。一人一人真剣な考えを持つことが出来、「戦争の怖さ、悲惨さを今後伝えていくためだ」「戦争を二度と起こさないための象徴として残している。」という意見が飛び交い、最後には「戦争は本当にいけない」「平和な世界になってほしい」と強く思うに至った。この実践を通し、子どもたちが戦争を過去の出来事として見るのではなく、身近なこととして捉えていたように思われる。

c) 子どもたちの感想から**(見学を終えての主な感想・疑問)**

- ・だれが、どうやって、つくったのだろう。
- ・日吉にこんな大きな地下壕があってびっくりした。今でもこうやって残っていてすごいと思う。
- ・地下に大きな施設をつくるということから、当時の戦争の激しさが分かる。
- ・どんなふうに使っていたのだろう。
- ・もし今戦争が起きたら、この地下壕を使うことになるのだろうか。
- ・今は役には立たないけれど、なぜ今でも残しているのだろうか。

(実践後の主な感想)

- ・戦争について勉強して戦争はいけないことだと強く感じました。今世界では戦争が起きているところがあるけれども、早く平和な世界になってほしいと思います。

・日吉台地下壕を見学して、こんなに近いところで戦争があったなんてびっくりしました。地下壕のことを調べていくうちに、地下壕を作るのにたくさんの人が働いていたこと、ここから指令が出ていたことなど、戦争の激しさが分かりました。地下壕は日吉で戦争が起きていた象徴だと思います。戦争は本当に悲しいものだと思います。

d) 実践を終えて

この実践を通して、子どもたちの学習の高まりを感じながら学習を進めることが出来た。戦争の悲惨さを感じ、また二度と起こしてはいけないと強く感じたようだ。そして現在に残る地域の戦争遺跡を学習し、その意義を考えたり、日吉台地下壕を大切に保存し、子どもたちに伝えてくださった保存の会の方々の活動にふれることができたことは、6年生の子どもたちには意義深かったと思う。

下田小学校では3年前から日吉台地下壕の見学を行っていて、戦争学習の教材として根付きつつある。また港区社会科研究会では、初任者研修や区内巡検で見学を行っており、日吉台地下壕についての認識も広がり、数校が6年生の社会科見学で訪れている。日吉台地下壕は、戦争と現在の子供たちとを結びつけてくれる他の地域にはない大きな存在だと思う。下田小が地下壕を中心に学習できるのは、下田小の特色であり、財産であり、大変幸せなことです。地下壕保存の会の方々、本当にありがとうございました。

報告

「第35回戦災・空襲を記録する会全国連絡会議」

会場：横浜開港記念館

熱中症で倒れる人が続出したというジリジリと暑い夏、2004年7月24日(土)25日(火)横浜・関内の開港記念館で「第35回戦災・空襲を記録する会全国大会」が開かれました。大会に先立って「米軍資料研究会」が23日と24日に開かれ、米軍の空襲資料の研究手法について、多くの発表がありました。この会から出されている「空襲通信」という冊子には



には横浜大空襲についての米軍マイクロフィルムの詳細な研究報告が掲載されていました。米軍の戦略爆撃に関する資料も横浜の空襲を記録する会でかなり翻訳がなされています。日吉の地下壕についての言及は見あたらなかったのですが、米軍の空襲は空襲の日時、出動機数、目標、与えた損害、受けた損害等々詳細に記録されていて、かなり緻密な計画性の下に行われていたことが分かります。今後日吉の空襲について米軍の記録にどの程度の記述があるのか研究を進めていく必要があると思います。

全体会：大会は午後から全体会で横浜の今井清一氏が歓迎の挨拶をした後、作家の早乙女勝元氏が「都民の戦火を語り継ぐー東京戦災資料センターから」と題して記念講演を行いました。氏は坦々とした口調で東京の戦災を記録する活動に対する都政の扱いが美濃部都政からその後の都政へと変わる中で様々に変わる状況を話される中で、戦災の記録を掘り起こす活動を主に取り組んだのだが、まず「入れ物、資料館」を、先に行政に造らせるのだった。会館をすぐにも造るといっていた行政がその後変化し、だんだん冷たい扱い

になっていく、その経過を話され、東京戦災資料センターが民間の運動の力でできてから、修学旅行や学生はじめ若い人達の多くの見学があり、開館2年目で多くの成果があがりつつあること、また憲法9条の問題を始め昨今の平和に向けての憂慮すべき状況から、しっかり本腰を入れてとりくんでいきましょうと語りかけられました。

特別報告：その後特別報告で疎開問題研究会、POW (prison of war : 戦争捕虜) 研究会、米軍資料研究会からの報告があり、さらに各地域、団体の活動報告が1団体7分という限られた時間の中で行われました。(発表地域；東京、名古屋、高知、福井、宇都宮、高松、呉、岡山、富山) どの団体も厳しい状況の中でこの1年どのような取り組みをやってきたか、熱心に報告されました。中には沖縄の平和の碑(いしじ)のように被爆を受けた方の実名から写真まできちんと調べ上げ、慰霊碑を造ろうと取り組んでいる団体もあり、戦争被害者をただの数字にしてはいけないという思いが痛切に伝わってきました。全体に35年を数える活動の年輪を感じさせる高齢の方が多かったのですが、しかし年齢を感じさせない熱のこもった報告が相次ぎました。特に高松の89歳になる女性は自らが被災してやけどを負った手と目の包帯を見せながら、戦災の語り部として、問題が片づくまで「まだまだ死ねません。」と大きなはっきりとした声で記念館の大会議室で百人からの聴衆を前に話され、盛大な拍手を受けていました。

25日(日)も半田、豊橋、小田原、岐阜と各地からの報告が続き、最後に来年の全国連絡会の開催地である長岡から活動の報告と来年度へ向けての歓迎の挨拶がありました。長岡は戊辰戦争でも激しい戦いがあり、また山本五十六元帥の故郷でもあり、それもあってか、地方都市としては大変激しい空襲に見まわれました。そのフィールドワークもあり、また長岡は花火でも大変有名なところで、開催日は花火大会に続く日でもあり、是非来年の8月は長岡へ大挙して来て欲しいということでした。

フィールドワーク：午後からは横浜大空襲の跡地を巡るフィールドワークで貸し切り路線バスを仕立てて記念館前から久保山霊園へ。暑い中でしたが、30名以上の参加がありました。久保山で霊園の墓地には献灯のある墓がいくつもあり、これは戦死した兵士の墓に横浜市長が献じたものだということでした。初めのうちは横浜市では戦死した兵士に献灯をしていたが、末期になると戦死者が多くなり、それも立ち消えになったということです。久保山からは横浜の港湾主要部が見渡せるところがあり、1945年5月29日の大空襲についての説明がありました。朝9時22分東神奈川から平沼橋、港橋、吉野橋、大鳥国民学校付近と着弾点を決め、目印の発煙爆弾を落とした後集中的に1箇所80機から150機のB29が焼夷弾を投下していきました。それはまさに戦略として港湾施設は狙わず、住宅密集地を狙った爆撃でした。東京大空襲もそうでしたが民間人が被害を受けるということが分かった上での無差別爆撃だったということがよく分かります。港湾施設はあとで米軍が使用するため、戦略的に爆撃しなかったのだということです。日本も中国・重慶などで無差別爆撃を行い、被害のみを強調できない立場ですが、戦争の悲惨さは忘れてはいけないと思います。久保山から坂を下ると両側が寺町になっています。久保山は横浜開港に伴い、下町にあった寺院・墓地を移転してできた霊場で、江戸時代吉田新田開発以来の無縁仏供養塔、関東大震災慰霊碑や朝鮮人虐殺の殉難慰霊碑、など日本近代の歴史を感じさせるところです。東京裁判でA級戦犯となった軍人・政治家の火葬は久保山火葬場で行われ、遺骨は秘密裏に処理されましたが、一部は興禅寺に回向され、またB・C級戦犯も含めて60人の忠魂碑が光明寺にあります。

坂を下ると三春台から関東学院、黄金町一带は空襲で一番ひどい被害を受けたところで、坂道にそって炎が吹き上げ、坂道を上に上がって避難した人達は焼死した人が多いということです。三春台には宮川香山という日本を代表する著名な焼き物師の窯（真葛焼）があったのですが、一族全滅で再興できなくなりました。関東学院は、関東大震災後に西洋のお城のような建物を三春台にモーガンという建築家の設計により建てました。ここにコベル師という宣教師がいて、戦前の日本の国策に合わない反戦教育をしたということで国外退去となり、フィリピンでゲリラをかくまったということで日本軍に殺害された悲劇がありました。コベル師の資料がこの建物の地下に展示されているということです。三春台から黄金町におりてくると、薬王寺、普門寺というお寺があり、その墓石、階段、積み石などには戦災の炎の強さを示す黒い焼けこげの跡がはっきりと残っています。中でも強い炎をあびて割れた石碑を見ると空襲のすさまじさが60年近く経った今もよく分かります。

黄金町の駅の橋脚にも空襲の焼けこげが残り、また機銃掃射のあとだという弾痕がコンクリートの色の違いで分かるように残されています。黄金町近辺は600人からの焼死者で埋まったということです。大通り公園の横浜戦災遺族会の手で平和記念碑が建立され、毎年5月29日には慰霊祭が行われています。

来年は空襲から60年、米軍の緻密な空襲資料を見るに付け、戦争は自然災害ではなく、人間が行っていることだ。人間が防ごうと思えば、防げないことではない。防ぐ努力をしていかななくてはならないという思いを強くしました。(文責：谷藤 基夫)

投稿

戦中・戦後の私の学生生活(2) (前々号よりの続き)

柳屋 良博

柳屋良博氏プロフィール

旧制山口中学から昭和19年4月慶應義塾大学文学部予科入学、勤労働員の後、昭和20年6月山口で陸軍に入隊、終戦後復学、慶應大学卒業後慶應大学日吉研究室職員、慶應大学三田情報センター整理課長、日吉情報センター副所長等を歴任され、平成4年3月定年退職されました。

旧制高校の入試に失敗した負い目は長く尾を引き、教師が教室に見えるまで、ウクレレを爪弾き『八百屋お七』を歌ったり、窓を開けて喫煙後の紫煙を出したりで、私大予科の実態を知らされた思いが強かった。徴用工に引っ張られるにしても、学校をやめて親元に帰りたいと訴えたが、母は妹の世話を知人に頼み、一か月ばかり私の下宿に同宿して食事の世話をしてくれたことは、恥ずかしい思い出である。

都内の交通には疎いので、渋谷駅から須田町行きの都電に乗り、神保町で古書を探すのを生きがいとしたり、新橋行きで六本木の古本屋に足をのぼし、新刊の『解析概論』を買って、これを私の求める古書と交換したこともある。これらの幾冊かが、戦後の学費に化けてしまうとは思わなかった。空襲が続くと古本屋の店頭には買いたい本が増える一方、こちらが持ち込む古本には見向きもされないで買い取りを断られた。当時は新刊書といえば理科系のものばかり、人文科学・文学関係のものはまず出版されなかった。

文・経・法の所属学部の区別をなくし、年齢別のクラス編成が行われたのも、理工学・

医学系以外の学生の徴兵猶予が撤廃されて、生徒がいなくなってしまうクラスもあるからだった。昭和18年3月の旧制中学卒までは上級学校進学のために一年の浪人が許されたが、19年3月卒業生からは進学か徴用の二者択一となり、浪人して再挑戦することはできなくなった。

家宛の手紙の文面から思い起すと、9月19日前後、旧友数名との下校途次、日吉駅方向から坂道を上がってくる配属将校・川生大佐に出会い、私だけが欠礼してしまった。詰問を受けて教官室に連行され、欠礼の理由を糾されて不適切な返事をしたらしく、学籍簿の保証人・第二保証人の身元を確かめられ、ともに現役将校であることが判明し、しかもかつて習志野演習場で父を知っているとのことだった。しばらくの間は、授業中であっても呼び出されて、塾出身かの年若い中尉の指導を受けていたが、「今は大人しくしている」と温かく諭されたことがある。

L組では10月まで授業が行われていたが、ついに11月7日から亀戸の風船爆弾造りに駆り出された。動員先は二階か三階建ての精工舎の近く、新しく監督官の将校が派遣されることになった元染め物工場で、亀戸六丁目と七丁目の境にあった日本擬革(あるいは皮革)株式会社だった。トイレット・ペーパーのように束に巻かれた和紙と和紙をコンニャク糊で貼り合わせ、蒸気の通う大きなドラム上を回転・乾燥させて、紙の間に空気が入り込まないように手で撫でつけながら巻き取るのである。コンニャクの粉を水で捏ねて四斗樽に糊を造る級友もいた。グリセリンに漬けて処理すると弾力がでるとかで、両国・国技館や有楽町・日劇などで縫製加工して風船が造られると聞いた。工場はやがて昼夜三交替制の稼働となり、深夜勤者にはサツマイモの粉で作った平たい餅が給付され、自宅から通勤する同僚がまずいというものでも、空腹の身にはとてもうまかった。ただ続けていると舌や胃袋に変調をきたした。

入学時の下宿先から昭和20年2月下旬、西山寮(目黒区駒場町795)に引越した。ここは広津和郎夫人の妹・神山かねさんが経営し、姪の広津桃子さんが女学校で教鞭をとってお母さんと生活しておられた。動員先の亀戸までの所要時間、雨・雪で不通になることが多く、帰りが遅いと元住吉止まりとなって日吉まで歩かされる東横線に愛想を尽かしたのと、一日二食付きよりも三食付きの下宿が何よりの魅力だったからである。

工場は昭和20年3月10日の空襲に遭って壊滅したという。たまたま私は徴兵検査を本籍地山口県萩市明倫館国民学校で受けるため離京中で、兵役は近眼のため第一乙種となった。3月11日品川駅に帰り着くと、駅頭ホームの騒然と放心したような異様な空気を肌を感じた。工場には下谷商業二年生の少年たちも動員されて『お山の杉の子』を歌いながら働いており、女子挺身隊の人たちも見かけたが、この大空襲でどうなったか気がかりである。機械の轟音や少年たちの歌声に負けじと、六号機の私たちは、明けても暮れても牢屋は暗いと『黒い鳥』や旧制高校寮歌をがなりたてた。

次の動員先は3月18日からの内務省土木出張所であった。鶴見駅近くの国道造成工事の現場で、トラックに土を入れて所定の場所まで押して行く土方仕事だった。その頃強制疎開家屋の取り壊しにも当たったが、中目黒駅辺りだったとは思うものの確かではない。

活動の記録 (2004年7月～8月)

- 7/2 「日吉5丁目の緑と住環境を守る会」の総会に運営委員2名が参加
- 7/3 地下壕見学会 27名 映演総連他
- 7/16 第2回運営委員会 会報71号発送(慶應高校物理教室)
- 7/21 地下壕見学会 20名 川崎大師診療所
- 7/24 地下壕見学会 20名 共産党永山後援会(午前) 定例見学会 7名(午後)
- 8/14 定例見学会 3名 第3回運営委員会(日吉地区センター)
- 8/20～23 第8回戦争遺跡保存全国シンポジウム館山大会
運営委員会員が14名参加 分科会発表
「旧海軍軍令部第三部・航空本部地下壕等の破壊をもたらす
マンション建設計画と反対運動活動報告」 茂呂秀宏
「表現ジャンルを超えた平和への競演」 岡上そう 富沢慎吾
- 8/27 地下壕見学会(慶應三田会) 洗足学園中学2年生と先生24名
(子母口貝塚～蟹ヶ谷地下壕～日吉台地下壕)
- 9/11 地下壕見学会(慶應三田会)
- 9/17 地下壕見学会(中央大学)
- 9/21 第4回運営委員会 会報72号発送(慶應高校物理教室)
予定
- 9/25 定例見学会

▲定例見学会は毎月第4土曜日に行っています。なお日程が変わる場合もありますので必ず見学窓口に申し込んでください。

(見学申込先 TEL&FAX045-562-0443 喜田)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 港北区白幡向町20-49 045-402-9090

(見学会・その他) 喜田美登里: 港北区下田町2-1-33 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://www.geocities.HeartLand-Hanamizuki/2402>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西 章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会

戦中・戦後の私の学生生活（１）

柳屋 良博

この度戦中、戦後の慶應義塾大学の一学生としての生活を詳細に書きつづっていただきました。貴重な記録ですので、今後何回かに渡って連載いたします。お楽しみにお読み下さい。

昭和19年度．．．大学予科一年

昭和19年3月5日、大阪府堺市浜寺公園の羽衣高女で慶應義塾大学予科入学試験の一次が行われてこれを受験、上京して3月20日二次試験を受け（信濃町・医学部・北里図書館講堂で口頭試問、病院内で身体検査）、昭和19年4月慶應義塾大学文学部予科に入学した。当時は六大学野球も行われておらず、口頭試問に備えて福沢諭吉について調べてみたが、使用していた国史教科書の一か所に名が挙げられているにすぎず、慶大については何の知識も持ち合わせていなかった。入学試験が東京の外に大阪で行われるのであれば、山口県在住の私にも受験が可能となり、京都の三高に進学した友人と二人で受験したのである。

予科校舎（日吉第一校舎）の正面玄関右側（南側）は大日本帝国海軍軍令部の専有するところであり、生徒は左側部分を使用した。このため生徒の出入りは主として第二校舎（医学部予科）に面した出入口を使っていた。なお南寮は連合艦隊本部として使われたと聞いている。一年生の自分たちは一階だったが、特定の固定した教室ではなく時限ごとに移動したように記憶する。第一校舎裏には木造校舎二棟（第一館、第二館）があつて授業を受けたことがあり、数クラス合同の動員説明会などには、第一校舎二階中央の図書室（現国語科・社会科・数学科教員室）が使われた。県立山口中学校卒の目には、屋上に無線アンテナが林立し、壁の分厚い鉄筋の校舎は、まるででっかい一隻の軍艦のように思われた。

北寮は塾の学生寮として使われており、クラスメートを訪ねた時には、ちょうど急ピッチでコールタールが塗られて迷彩が施されているところだった。クラスメートの話では、近いうちにこの寮を出て、駅の向う側の野球場の木造合宿所に移るということであつた。広大な陸上競技場の一角では作業中の海軍兵士の姿を見ることもあつたが、いつの間にやら第一校舎正面前には二基のコンクリート製の防空壕出入口ができ、警報が鳴ると海軍さんや女子職員の出入りする姿が見られた。

親元を離れての初めての下宿生活は、日吉校舎の下見にきて、駅の反対側、駅前近くの八百屋さんに尋ねて決まったものである。食糧事情の悪い時代であつたが、昼食ぬきの二食付きで横浜市港北区日吉本町1851奥村長生方に下宿させてもらうことになった。他に藤原工大予科を含めて三名かの生徒が世話になっており、食堂で食事をとった。初め一階の六畳に、その後静かな二階の四畳半に部屋を変えた。駅前にはかなり大きな丸善書店(現工事中で建物無し、亀屋の駅側)と徴用のために店を閉じたと思われる数軒、少し離れた所に郵便局があるくらいで、駅前から五本の街路が放射線状に伸びた、閑静な新興住宅地だったように思う。駅から下宿までの間には古本屋山村書店(現Starbucks Coffee)と一軒の食事処があつたと思うが、いつも休業状態だった。背景となる丘陵には赤瓦葺きの文化住宅が幾軒か点在するだけの緑の丘で、牧場もあると聞いた。朝の散歩で、放射線街路の奥の方、下田町にはラグビー場・野球場などがあり、〈日本ラグビー蹴球発祥記念碑〉という碑を読んだ記憶がある。

5月15日から二週間、勤労奉仕のため栃木県下の村の集会所での分宿があり、ここから農家の応援に出向いた。下都賀郡の何処だったか思い出せないが、小山で乗り換えたように思う。作業内容は、時期から考えて麦刈りだったようだ。お茶請けに赤蕪の漬物が出されたが、私には珍しかった。帰校するとまもなく中間試験が行われ、ほとんど勉強もしていないのに、入学後初めての試験とあつて相当緊張した。8月夏休み帰省中と記した丸帽姿の写真が一枚残っているので、夏期休暇があつたようだ。そういえば関西・広島方面の友人たちと一緒に東海道線を下つたのが、この時だったかも知れない。

大學予科一年は文・経・法合わせて一二クラスだった。外部から受験して入学した生徒と無試験で内部進学した普通部・商工学校の生徒と、合わせて数百名が在籍していた。『慶應義塾百年史』等を見ても学生数は明確ではなく、私の記録にもないが、昭和19年より入学定員減少と記載されている。A組からK組までは第一外国語を英語、第二外国語を独語とするクラスであり、私たちのL組は英語を第一、仏語を第二とする者と、五～六名の独語を第二とする者を合わせ五〇余名だったと思う。クラス担任は一ノ瀬恒夫先生で、先生の専攻はドイツ語・ドイツ文学であり、週一度のゲーテ・ファウストの話と生徒の自己紹介・研究発表の指導が先生の担当だった。授業には欠席者がいたが、一週の間割では丸一日と半日が軍事訓練に当てられ、この日になると出席する珍しい顔が増えた。これは旧制中学での教練の成績と予科での出席日数とが、入隊後の幹部候補生採用試験の可否を左右するからであつた。中学時代は武器庫に三八式歩兵銃が一人宛割り当てられていたが、予科では一丁を幾人かで共用するので責任感も薄く、油塗りの手入れは疎かになった。査閲(軍事教練では成績を実地に調べることがあり、査閲官がいた)では、日吉から多摩川河辺まで銃を担いで中原街道を往復させられた。

昼休み直前の授業が終わると、赤屋根食堂に駆けつけて行列をつくらぬぎり売り切れで、その日は昼食抜きとなつてしまった。お米ではなくうどんを細切れにした代用食であっても、食糧事情が悪くなる一方の配給下では、自宅通学者であっても一人分外食ができれば、家計には大助かりであつたからだ。お陰で下宿している者には災難だった。母からは卵・砂糖・飴ぬきで小麦粉を焼いた擬似どら焼き風の皮、梅干のお結び、干し柿などの小包を毎週のように送ってきて、多少の儼などは気にもしないで口にしたり。石鹼をお土産に日吉近くの馴染みの農家を訪れ、富有柿や梨を売ってもらう友人のお供をして、多少分けてもらったが、その場所は思い出せない。私の方は買い求めた図書を一貫目の小包にして、わが家に送ったが、郵便局の受付個数には制限があつた。

勉強だ人格形成だとはいっても、しょせん私は食べ盛りの若者に過ぎなかった。(以下次号に続く)

戦中・戦後の私の学生生活 (2)

柳屋 良博

(前々号よりの続き)

柳屋良博氏プロフィール

旧制山口中学から昭和19年4月慶應義塾大学文学部予科入学、勤労働員の後、昭和20年6月山口で陸軍に入隊、終戦後復学、慶應大学卒業後慶應大学日吉研究室職員、慶應大学三田情報センター整理課長、日吉情報センター副所長等を歴任され、平成4年3月定年退職されました。

旧制高校の入試に失敗した負い目は長く尾を引き、教師が教室に見えるまで、ウクレレを爪弾き『八百屋お七』を歌ったり、窓を開けて喫煙後の紫煙を出したりで、私大予科の実態を知らされた思いが強かった。徴用工に引っ張られるにしても、学校をやめて親元に帰りたいと訴えたが、母は妹の世話を知人に頼み、一か月ばかり私の下宿に同宿して食事の世話をしてくれたことは、恥ずかしい思い出である。

都内の交通には疎いので、渋谷駅から須田町行きの都電に乗り、神保町で古書を探すのを生きがいとしたり、新橋行きで六本木の古本屋に足をのぼし、新刊の『解析概論』を買って、これを私の求める古書と交換したこともある。これらの幾冊かが、戦後の学費に化けてしまうとは思わなかった。空襲が続くと古本屋の店頭には買いたい本が増える一方、こちらが持ち込む古本には見向きもされないで買い取りを断られた。当時は新刊書といえれば理科系のものばかり、人文科学・文学関係のものはまず出版されなかった。

文・経・法の所属学部の区別をなくし、年齢別のクラス編成が行われたのも、理工学・医学系以外の学生の徴兵猶予が撤廃されて、生徒がいなくなってしまうクラスもあるからだった。昭和18年3月の旧制中学卒までは上級学校進学のために一年の浪人が許されたが、19年3月卒業生からは進学か徴用の二者択一となり、浪人して再挑戦することはできなくなった。

家宛の手紙の文面から思い起すと、9月19日前後、旧友数名との下校途次、日吉駅方向から坂道を上がってくる配属将校・川生大佐に出会い、私だけが欠礼してしまった。詰問を受けて教官室に連行され、欠礼の理由を糾されて不適切な返事をしたらしく、学籍簿の保証人・第二保証人の身元を確かめられ、ともに現役将校であることが判明し、しかもかつて習志野演習場で父を知っているとのことだった。しばらくの間は、授業中であっても呼び出されて、塾出身かの年若い中尉の指導を受けていたが、「今は大人しくしている」と温かく諭されたことがある。

L組では10月まで授業が行われていたが、ついに11月7日から亀戸の風船爆弾造りに駆り出された。動員先は二階か三階建ての精工舎の近く、新しく監督官の将校が派遣されることになった元染め物工場で、亀戸六丁目と七丁目の境にあった日本擬革(あるいは皮革)株式会社だった。トイレット・ペーパーのように束に巻かれた和紙と和紙をコンニャク糊で貼り合わせ、蒸気の通う大きなドラム上を回転・乾燥させて、紙の間に空気が入り込まないように手で撫でつけながら巻き取るのである。コンニャクの粉を水で捏ねて四斗樽に糊を造る級友もいた。グリセリンに漬けて処理すると弾力がでるとかで、両国・国技館や有楽町・日劇などで縫製加工して風船が造られると聞いた。工場はやがて昼夜三交替制の

稼動となり、深夜勤者にはサツマイモの粉で作った平たい餅が給付され、自宅から通勤する同僚がまずいというものでも、空腹の身にはとてもうまかった。ただ続けていると舌や胃袋に変調をきたした。

入学時の下宿先から昭和20年2月下旬、西山寮（目黒区駒場町795）に引越した。ここは広津和郎夫人の妹・神山かねさんが経営し、姪の広津桃子さんが女学校で教鞭をとってお母さんと生活しておられた。動員先の亀戸までの所要時間、雨・雪で不通になることが多く、帰りが遅いと元住吉止まりとなって日吉まで歩かされる東横線に愛想を尽かしたのと、一日二食付きよりも三食付きの下宿が何よりの魅力だったからである。

工場は昭和20年3月10日の空襲に遭って壊滅したという。たまたま私は徴兵検査を本籍地山口県萩市明倫館国民学校で受けるため離京中で、兵役は近眼のため第一乙種となった。3月11日品川駅に帰り着くと、駅頭ホームの騒然と放心したような異様な空気を肌を感じた。工場には下谷商業二年生の少年たちも動員されて『お山の杉の子』を歌いながら働いており、女子挺身隊の人たちも見かけたが、この大空襲でどうなったか気がかりである。機械の轟音や少年たちの歌声に負けじと、六号機の私たちは、明けても暮れても牢屋は暗いと『黒い鳥』や旧制高校寮歌をがなりたてた。

次の動員先は3月18日からの内務省土木出張所であった。鶴見駅近くの国道造成工事の現場で、トロッコに土を入れて所定の場所まで押して行く土方仕事だった。その頃強制疎開家屋の取り壊しにも当たったが、中目黒駅辺りだったとは思うものの確かではない。

戦中・戦後の私の学生生活（3）

柳屋 良博

柳屋良博氏プロフィール

旧制山口中学から昭和19年4月慶應義塾大学文学部予科入学、勤労働員の後、昭和20年6月山口で陸軍に入隊、終戦後復学、慶應大学卒業後慶應大学日吉研究室職員、慶應大学三田情報センター整理課長、日吉情報センター副所長等を歴任され、平成4年3月定年退職されました。

昭和20年度．．．大学予科二年

昭和20年4月5日学校に集合して新たな動員先の説明があった。すなわち南武線鹿島田駅の芝浦電気特殊鋼の組み立て工具研磨係で、ここでは旋盤操作を教えられた。二等辺三角形の形をした特殊鋼を先端に固定した金属棒を旋盤に取り付け、金属を削るのである。左右の手を同時に逆方向に回すことがまだ会得できないでいた16日、この工場も空襲でやられてしまった。崩壊した建物の下からバイト（金属を削る刃物）を取り出して灰を落とし積み上げるのである。この作業は私の西山寮罹災まで続いた。東横線の工業都市駅か武蔵小杉駅から、南武線の枕木を踏んだり、路肩を歩いて出勤したこともあり、川崎駅回りでも通勤した。工場から提供される半ば焼け焦げのお米で握られたお結びやおはぎをほおばりながら、友人と駄弁るのが目的で、何時入隊通知が来るか分からない我々は、出勤正常ならざる早退常習犯であった。たしか日給二円が報酬だった。

西山寮には十人近くの学生が下宿しており、一高在学中のガンさんと呼ばれる大変風格のある名物男もいた。ポンプで洗面していると軒下で山鳩の鳴く、商売を抜きにした古びた二階建ての学生下宿だったが、5月25日夜10時過ぎ頃から26日払暁にかけての空襲で焼け落ちてしまった。最初は戦災などかわりのない一夜と思っていたが、近くの輜重兵連隊とかに焼夷弾が落ちたと伝え聞き、やがて帝都線の枕木がところどころ燃え始め、火も寮に近づいてきた。付近一帯が明るくなり、強風に逆巻く火の手が音を立てて吹き荒れ、屋上でバケツを使って防火しても焼け石に水で西山寮が危なくなり、ガンさんの指示で一高の武道場（無声堂）に避難して全員無事だった。夜具は自室にのべたままであり、崖下

の防空壕内に入れておいた、衣類を詰めたトランクも燃え尽きているのを翌朝確かめた。一高前駅からの細道には焼け残った樹木や家屋の一带も目に入り、土地の起伏に左右されたのか激しい火勢と熱風が気ままに走った跡であった。

生活の場を失っては親元に帰るほかなかったが、寮の経営者は収入源を失い、しかも住む場所もなく大変なことだった。火が回ってきた時の下宿のおばさんの耳をつんざく悲鳴が忘れられない。渋谷駅で見た掲示で山手線は不通、回復した東海道線は品川駅から発着していることを知り、保証金を払っては買い求めた貸本を収めたリュックだけを背に、品川駅まで歩く覚悟で出発したが、幸いトラックに拾われた。京浜デパート沿いの街路上に行列を作って一晩を過ごし、罹災証明書を示して乗車券を買い、5月28日12時発かの列車に乗り、急行で24時間を要するところを30時間近くかかって山口に辿り着いた。戦闘帽に受け取った乾パンと出征した友人の残して行ってくれた真っ白い切り餅を生のままかじって飢えをしのいだ。空襲を体験したことのない母からは、寝具や衣類の所在を尋ねられ惜しがられた。

6月9日か10日母の知り合いの軍人さんが自宅に見え、私の入隊を知らせてくれた。下宿の罹災と工場の欠勤、そして入隊を担当の一ノ瀬先生宛毛筆で認めて休学届を郵送したが、空襲下の郵便事情を考えると、先生が受け取られたかどうかは疑わしく、戦後も先生に確かめていない。

6月18日山口市の西部四部隊に入隊した。営門の前に集った人たちは、寄せ書きをした日章旗を斜めに肩に掛け、家族との別れを惜しんでいた。私は奉公袋だけを持って見送りの家族と待機していたところ、中学時代の同窓生数名から、「好い気味だ、軍隊で鍛え直されて来い」と罵られたことが忘れられない。行軍で秋吉洞近くの大田を経て、28日日本海側の三隅国民学校（大津郡三隅町）に到着、大国28346部隊田辺隊に所属した。教室が兵舎となり、学校付近での訓練が始まった。

入隊早々は毒ガス小銃担当と告げられたが、軽機関銃分隊として訓練された。石ころの多い川原で両肘・両膝を使って匍匐前進を繰り返し、木切れで鉄兜を叩かれながら鍛えられた。各自が見よう見まねで編んだ即席のわらじを装着しても、大変厳しく体にこたえた。仙崎港まで行軍し、「貴様らの生死与奪の権は自分にある」と絶叫する中隊長の抜き身の拳銃に脅かされながら、満州から到着したという60キロかの大豆袋を運ぶ体験もさせられた。万事が要領の軍隊では、荷揚げ中に竹筒を袋に差し込んでちよろまかした大豆を豆腐に変える古兵の腕がねたましかった。

本来は入隊三か月後に受けるはずの第一期検閲が近づいてくると、速成兵士の訓練は専ら戦車に対するものに変った。ビルマ戦線で考え出されたとかいう戦法は、大地に穴を掘って身を隠し、戦車に見立てた大八車が近づいてくると、かなりの重量の一辺30センチ位の立方体の木箱に砂を詰めて爆雷に見立てたものを、車の両輪の間に投げ出して戦車を爆破し、わが身を地上に伏せれば助かることもあるという肉弾攻撃だった。爆雷は箱爆雷あるいは破甲爆雷もしくは破鋼爆雷かもしれないが、口伝教育なのでつまびらかではない。体中の水分がすっかり汗となって流れ尽くすような真夏の灼熱の炎天下、娑婆では振り向いたこともない真桑瓜でも、小隊長の私費で配られた時の生き返ったようなひとときは忘れられない。軍隊訓練で受けた身体上の苦しさを思えば、相当な苦難であっても克服できないはずはないと、戦後の生活で幾度そう思ったことか。

敗戦は8月17日だったかの軍旗焼却で知らされた。少量の生地の灰を付与され、今時の四十七士気取りで、連合軍に対する復讐を誓わされた。列車の屋根の上にまで人を乗せて、復員は遠距離の高齢者から始まり、一番若い自分たちは憲兵要員として、8月30日三隅から山口の原隊に帰った。遅れてやって来た神風が、敗戦後の木造兵舎に吹きつけ、かなり大きな中隊の建物を土台から揺さぶり、台風襲来の怖さを体験した。次いで豪州軍が進駐してくるというので、10月16日秋吉台の演習時に使用する兵舎に移動した。用務といえば、時に将校宅に粉末味噌・粉末醤油・携帯口糧や机・椅子などの備品を運ぶ私用のようなもので、これは使役と呼ばれた。粉末の調味料のあることを軍隊で初めて知った。時に煙草・

菓子が一兵卒にまで配布されたが、自分の軍隊経験では酒保など見たこともなかった。当時、喫煙習慣はなく、菓子と交換して随分ありがたがられたものだ。あとは毛布にくるまり横になっているだけの毎日となり、退屈さを紛らわせるための悪戯心から『ほまれ』や『光』を吸ってみて、目が回るどころか美味しくて病みつきとなった。復員時には星二つのボツダム一等兵に進級し、月の手当て10円だかの一年半分かを給付されて自宅に帰り、しばらくの間、蚤と虱退治に熱中しなければならなかった。

昭和21年度. . . 大学予科三年

昭和20年5月予科二年で罹災して帰山、入隊・復員と人並みの体験をした。在京する親戚や知人はなく、空襲による惨禍を考えると下宿などあるはずもなかった。それでもL組の友人に下宿探しを依頼し、「復学を願っている者がいることを忘れないでもらいたい」と訴える手紙を書くことが私の仕事となった。そのお陰でか突然クラスメートから電報を受け、昭和21年10月18日杉並区馬橋2丁目一鳴荘別館内に住んでいた母の知人の好意を頼って上京、21日に予科三年に進級するための追試験を受けたが、下宿などはなく28日には帰郷するほかなかった。三ノ橋の予科校舎（港区新堀町7）事務室に出頭すると、日吉の空襲と撤収で学籍簿が焼けたとかで所属学部・氏名などの自己申告をさせられ、英語・仏語・数学の試験を受け、他の科目はレポートとして山口から送付させて頂くことになった。山崎福二先生が対応してくださったように思う。

入学時には二年制の大学予科であったが、敗戦によって予科は三年制に戻った。勤労働員と入隊だけで予科二年に進級したままだったので、三年に進級するための試験が必要とされた。しかし三年になったまま一日の出席もないので、21年度は原級に止まり、22年度に改めてもう一度三年生としての勉学を続けることになった。

京浜線の川崎駅と東京駅間の海側を見渡すと、すっかり一面瓦礫の山の焼野原であって、復学は果たすことができるとしても、下宿探しとなると別問題で困難の極みであった。食糧事情は最悪、お米を月ごとにいくらか用意すればと言われても、農家ではない私には打つ手立てがなかった。学業を続けるには経済上の問題が大きく、八方塞がりだった。入隊時までクラス担任であった一ノ瀬先生に下宿問題の解決を助けて頂くようお願いして、21年2月には一度上京するよう勧められたこともあった。久里浜の海軍通信学校跡への塾一部の移転交渉、九段禁衛府の学生会館への変身、塾内での学生の福利・厚生部門の創設などをお知らせ頂いた。陸海軍の諸学校生徒には官公私立への無試験の編入が認められたが、私大予科生にはこの門戸は開かれず悶々の日々であった。

私は無収入のまま遊んでいるわけにも行かず、敗戦の翌年昭和21年5月28日から、母のついで山口県地方世話部雇員に採用され、遺骨班に配属され庶務に従事した。敗戦までの連隊区司令部であり、外地からの復員兵によって持ち帰られた遺骨・遺品、戦没者名簿を受領してご位牌を作り、遺骨箱にお納めして白布に包み、県下各地で御遺族に伝達、靖国神社合祀を申請するなどが業務であった。しかし復学を果たすため、ここを昭和22年3月29日に退職した。

昭和22年度. . . 大学予科三年（2度目）

4月17日品川駅着、西山寮にいた新潟出身の友人に下宿探しを助けてもらって、彼のおじさんの知人の縁で、神田神保町三省堂の裏だったかの喫茶店を訪れ、中二階の空いている床部分を借りることにした。友人が帰宅すると、「女給さんが間借りしていて風紀上好ましくない」と忠告され、とどのつまり友人が寄留中の六畳玄関の間に、食事・部屋代なしで同居させてもらうことになり、4月25日大田区大森9丁目296笠原由太郎方に押しかけた。こうして下宿問題は他人の犠牲によってひとまず解決したことになり、5月1日から二度目の予科三年生として登校した。

職業軍人だった父は、昭和19年初め南京を発ち、ダバオ方面の南方に行くという言い伝えをしたままの生死不明だった。敗戦の翌年2月南海派遣ラバウル第一集団本部、つまり捕虜収容所からの軍事郵便ハガキで生きていることが分かり、21年5月突然復員し帰国、一か月余り復員局囑託として残務整理に従ったあと、公職追放で無収入となった。女学校

を出たばかりの妹が銀行勤め、彼女が唯一の現金収入者であり、郵便貯金からの教育費用の引き出しも在学証明書を見せての制限付きだった。学資が無くなれば退学する前提で復学を果たしたのである。なお父は私の卒業前年度昭和24年12月に死去し、以後母の弟が母に小遣いを月1500円渡してくれて、間接的に私を補助してくれた。

ともかく予科卒業を取りあえずの目標として、三ノ橋の授業には真面目に出席した。教師の方も心得たもので、一年後輩に当たるクラスの外国語の授業など、戦争中の動員で行えなかったらしく、かなり程度を下げているように思われた。予科を終了して退学するかどうか、私にとっては何よりの頭痛の種であった。

昭和23年2月29日、数寄屋橋のたもとをたまたま京都出身のL組の友人と歩いていて、学生ピーナツを売っている丸帽姿の藤原工大の塾生を見かけ、友人が声をかけてくれた。明治学院在学中の学生だかが主催する学生互助会という団体のあることを知った。記憶も定かではないが、御茶ノ水駅近くの本部事務所を訪ねてピーナツ売りをさせてもらうことになり、どうにか学部に進学して学業を続ける目安ができたと思われた。とはいっても学生が本業なのか、アルバイトが本業なのか分からなくなるありさまだった。

以後アルバイトは学生ピーナツ売り、アイスキャンデーの製造・販売、闇のコッペパン売り、リンゴ売り、鋳物工場での砂落としと続けた。予科三年を終了したところで、一ノ瀬先生の好意で日本育英会奨学資金の申請をしていただき、昭和23年8月21日に採用通知を受けて、学部一年から卒業までの間授与された。就職後に結核・手術による入院中を除き、毎年年度末に返還した。家からの僅かな送金の他に、奨学資金と学生アルバイトによる現金収入がなければ、学業の継続などできるはずはなかった。

昭和23年度．．．大学学部一年

学部入学式は昭和23年4月12日で、とりあえず進路を文学科フランス文学専攻に決めて、午前中は授業を聴講、午後はピーナツ売りに変身した。幻の門の前近くの外食食堂で昼食をとって、事務所に出向き、割り当てられたその日の場所にダンボール一箱と簡易な折り畳み式の台を持って出かけるのである。

3月2日地下鉄銀座線の京橋駅の出入口に初めて立った。まじかには赤レンガの東京相互銀行のビルがあったと思う、ウイスキーグラス一杯分のピーナツが三角形のセロファン袋に入れられてダンボール箱に2100個詰めてあった。二袋15円で売って幾らかもらったが思い出せない。退社時の勤め人を狙って「二袋15円の学生ピーナツはいかがですか」と呼びかけるのだが、いつごろから声が出るようになったのだろうか。新橋駅構内では新聞売りの兄ちゃんに、ちょっと貸した学生服にはおるジャケットを持ち逃げされたり、日本橋白木屋横の地下鉄口では、路上にかなりの紙幣を落とした人に声をかけ、後から自分のものにしておけばと思ったこともある。

そのうち数年前慶大予科に在籍して、浅子先生から国史を教わったという東大法学部の学生から声をかけられ、所属するグループからの独立に誘われた。新しい団体は有楽町のガード下にあった日の基事業団で、選挙時には社長を応援し、学生グループに出資してもらったらしい。東大農学部院生と法学部学生の二人がボスで、今度は東横線のガード下・渋谷区並木町31吉田文一（あるいは又一）さんのウドン製造所と同じ板囲いの中で、アイスキャンデーの製造・販売に当たった。5月13日大森の笠原さん宅を引き上げてここに移り、蛍友会と名乗って19日から製造機の運転を始めた。板囲いの中には一畳半位の板敷き小屋があり、ここがねぐらであり、事務所にもなった。

市販されているサクサクとした歯応えのするアイスキャンデーが製造できず、砂糖の代わりにサッカリンやズルチン、あるいは澱粉を使ったりして苦労した。夜遅くまで製造して冷凍庫を満杯にしておき、陽が上がって暑くなると近くの渋谷実践・青山学院などの学生が集まってくるので、彼女らにキャンデーを卸すのである。製造所は渋谷駅裏口を利用する人たちの通学路上にあった。木製小箱を肩に周辺を恵比寿あたりまで売り歩き、箱に残った箸の本数を確認して、販売本数の代金を納めてもらうシステムだった。常時稼動しているモーターが製造・保存の原動力であり、区画内に響く騒音は相当なものだった。微

収した代金をボスに渡した後のことは残念ながら知らない。

アイスキャンデーは秋風の訪れと共に売れなくなり、渋谷駅裏口に降りる担ぎ屋さんの荷物を預かって、9月初めだったか渋谷警察の裏手の道場に同僚と二人、引き止められて正座させられたこともある。闇のコッペパンを軍隊時代の雑嚢に入れ駅近くの日本通運の仲仕さんに売り歩いたり、井の頭線ガード下の店先でリンゴ売りの経験もした。10月中旬からは千葉県松戸とかから仕入れてきた落花生を煎って、キャンデー製造機の上を広げて冷やし、ウイスキーグラスで量って袋に納めて学生ピーナツを作り、販売範囲を新橋駅までと限って、地下鉄沿線各駅で学生を使って販売した。昭和24年2月6日ボスたちは、キャンデー溶液と割り箸を入れて、アンモニア液のタンクに漬けて製造に使用した多くの金属管を売却して急場をしのいだ。板囲いに集まって働いた学生たちも徐々に姿を消し、私も昭和24年2月17日には大森の笠原さん宅に帰った。

昭和24年度／25年度．．． 大学学部二年／三年

旧制私立大学最後の学生として、昭和25年9月に卒業するまでの一年余は笠原鑄造合金の鑄物工場で砂落しに従事した。授業があれば午前中だけ聴講し、時間のある限り卒論の準備にも当たった。一緒に入学し中国から復員・復学し、私を自分の部屋に同室させてくれた一歳年上の友人は、昭和25年3月英文科を卒業したが、希望したジャーナリズム界には適当な就職口がなく、経済的には恵まれていたので9月過ぎまで高等遊民だった。そのうち彼は別天地を開拓するとかで函館に移ることになり、私は一人となった。

入学時から起算すれば本来昭和25年3月卒業のはずだったが、復学が一年遅れて昭和26年3月卒業予定のところ、学制改革により繰り上げで昭和25年9月末の卒業となった。翌年3月まで在籍することは認められたが、育英会の奨学資金が9月打ち切りと決まり、学業を続けることはできなかった。たまたま慶應義塾図書館の館員募集があり7月28日に応募したが不合格、8月には中学時代の担任でもあった数学の教師が、山口県の教育委員会に勤務しておられた関係から、山口県都濃高校と安下庄高校の英語教員の就職口を紹介されたが、英語担当には自信はなく、県の実施する統一試験を受験しないで教員になれる最後の機会であったが辞退した。8月7日慶應義塾塾監局事務員募集の掲示に応募して、三田と日吉のそれぞれで面接を受けて採用され、9月11日から日吉事務室に出勤した。

教務課でトレーニングを受けていたところ、日吉研究室開設の運びとかで、16日から図書館日吉分室・事務室の片隅で教員用図書整理に当たることになった。図書整理のにわか勉強と図書館側の指導を受けながら、リンゴ箱に詰めて積み上げられていた図書（主体は旧予科図書室所蔵の和洋書）の登録・分類・装備を12月までに終えた。

また永い間寄留させて頂いた笠原家の次女の方の結婚も決まったとか、お祝いをと思いつながら懐具合は苦しく、昭和25年12月10日蒲田駅近くの大田区女塚2-6唐沢寿寿子方に転居した。塾の給料は低く、六畳二人の相部屋での下宿生活が始まった。昭和26年春休みには塾図書館方式による和書目録の作成に着手し、5月7日旧日吉寄宿舍の北寮に引越し、ここが大学教員の研究個室・書庫および事務室となり、15日日吉研究室が開室した。

この文を書くに当たり、六〇年前の日記帳をひもといてみた。山口中学時代の担任・武田義孝先生はベルリンオリンピックの体操の主将だったが、私が中学四年の頃結核で亡くなられた。先生は日記をつけることを奨励され、その影響を受けた。日記は戦争が激しくなってきたからは検閲を恐れて鉛筆書きにしたり、インク不足で粉末インクを水で溶いて使用したため、判読できないところがあった。しかし今回日付を書き入れることができたのは、この日記のお陰である。また、母もよく手紙をくれていたことが大変役に立った。今は亡き母に感謝を奉げる。

(元慶應義塾大学日吉情報センター副所長)